

マンAHLスマート・レバレッジ戦略ファンド（愛称：スマレバ）

受益者の皆様へ

運用状況について

2024年4月18日

平素は当ファンドをご愛顧賜り、厚く御礼申し上げます。
当ファンドの運用状況についてお知らせいたします。

お伝えしたいポイント

- ・ 堅調な株式市場を背景にスマレバの基準価額も上昇基調
- ・ 投資配分比率は2021年来の水準へ拡大（アクティブに収益機会を追求）
- ・ 引き続き、株式・債券のリスクを徹底的にモニタリング

基準価額・純資産の推移

2024年4月17日現在

基準価額	9,359 円
純資産総額	325億円

当初設定日（2019年11月12日）～2024年4月17日



※「分配金再投資基準価額」は、分配金（税引前）を分配時にファンドへ再投資したものとみなして計算しています。
※基準価額の計算において、実質的な運用管理費用（信託報酬）は控除しています（後述のファンドの費用をご覧ください）。
※過去の実績を示したものであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。

堅調な株式市場を背景にスマレバの基準価額も上昇基調

■ 2023年来の市場環境 ～ 早期利下げ観測の台頭により株式が大幅に上昇

株式市場は、2023年の年初より、賃金上昇率の鈍化でFRB（米国連邦準備制度理事会）の利上げペースが減速するとの期待などから上昇して始まりました。その後、米国地方銀行の経営破綻に端を発する信用不安の高まりから、3月半ば頃にかけて株式市場は一時下落しましたが、7月末にかけては、AI（人工知能）関連半導体メーカーの強気見通しや米国の債務上限問題の解決、インフレ率の鈍化などが好感されて上昇しました。8月以降は、力強い経済指標やインフレの高止まりを受けて長期金利が上昇したことや、FRBによる政策金利見通しが引き上げられたことから10月末にかけて下落しましたが、その後は米国雇用市場の過熱感が緩和したことや、FRBの利下げ開始時期が早まるとの期待が高まったことから大幅に上昇しました。

債券市場は、経済指標の上振れや米国地方銀行に対する過度な信用不安の後退などを背景とした早期の引き締め終了期待のはく落、インフレの高止まりを受けて長期金利が上昇したこと、FRBによる政策金利見通しの引き上げなどを受けて、2023年10月末にかけて下落しました。その後年末にかけては、FRBによる早期利下げ開始期待から上昇しました。2024年に入ってから、底堅い米国経済を背景に経済指標が市場予想を上回ったことなどから金利は反転し、当季成期末にかけて債券市場は下落基調となりました。

市場全体のボラティリティ（価格の変動性）については、信用不安への懸念や地政学リスクの高まりなどを背景に一時的に上昇する局面もありましたが、2023年以降株式市場では低下しました。また、債券市場においてもおおむね横ばいの状態が続いていたものの、2024年3月末にかけては低下しました。

世界株式・債券の値動きの推移（日次・円ベース）

（2022年12月30日～2024年3月29日）



（出所）ブルームバーグ

※ 世界株式はMSCIワールド（配当込み、円ヘッジ）、世界債券はFTSE世界国債インデックス（円ヘッジ）を使用。

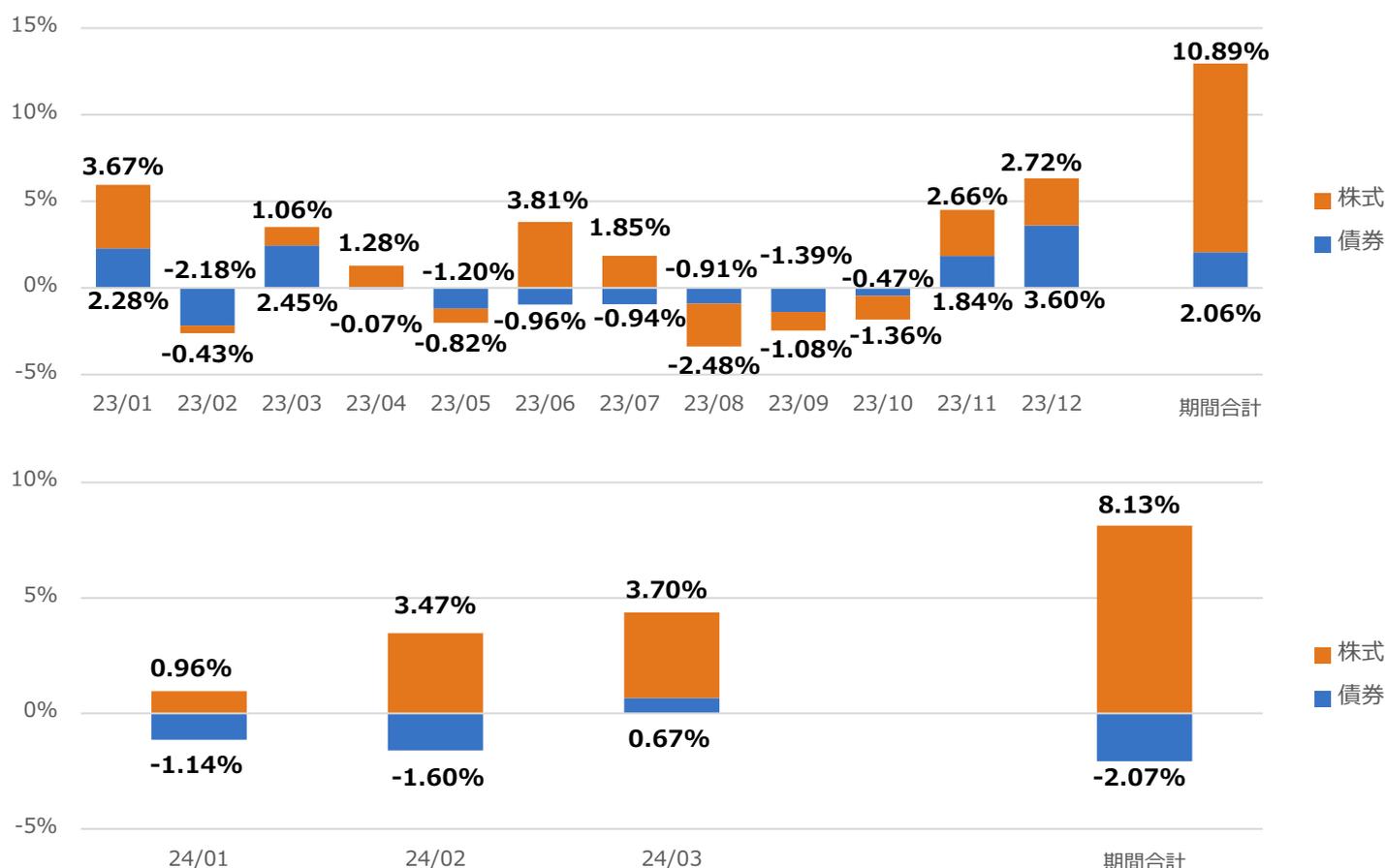
※ 円ヘッジとは、外貨建て資産の為替変動による影響を抑えるため、対円で為替ヘッジを行う仕組みです。その際、対象通貨の金利差分のヘッジコスト（プレミアム）が発生します。為替変動リスクの低減を図りますが、為替変動リスクを完全に排除できるものではありません。

■ 2023年来の運用状況 ～ 株式から大きくプラスリターンを獲得

当ファンドは世界の株式と債券を投資対象としています。2023年は、インフレ圧力の継続やFRBによる金融引き締め長期化観測を受けて、世界の株式および債券市場が軟調となる局面もありましたが、年末にかけてインフレ圧力の鈍化による早期利下げへの期待感から世界の株式および債券市場が上昇に向かう中、当ファンドは、通期で株式と債券の双方からプラスリターンを獲得しました。

2024年の株式については、米経済のソフトランディングに対する期待や、3月にFRBが市場予想通り政策金利を据え置いたほか、年内3回としていた利下げ予想を維持したことなどが好感され、3ヶ月連続でプラス寄与となりました。一方、債券は1月～2月にかけて、FRBが早期利下げに慎重であるとの見方が広がったことを受けて金利は上昇（債券価格は下落）しましたが、当ファンドは債券のリスクが引き続き高水準であったことから投資配分を圧縮しており、マイナス幅を抑制することができました。3月以降は、FRBの金融引き締めが長引くとの見方が後退し、6月にも利下げを開始するとの観測から金利は小幅に低下し、プラス寄与となりました。

投資対象ファンドの株式・債券の資産別寄与度（月次ベース、2023年以降）



(出所) マン・グループ

* 寄与度分析は投資対象ファンドに対するものであり、当ファンドの実績とは異なります。

※ 寄与度分析の数値はAHLプログラムのシステムから算出された推定値であり、運用報酬/金利/手数料は考慮されていません。スリッページ、売買、為替の変動、取引執行後の調整等により差異が生じる可能性があります。そのため各セクターの寄与度の合計は、ファンドのリターンとは一致しません。

投資配分比率は2021年来の水準へ拡大（アクティブに収益機会を追求）

■当ファンドの運用戦略について

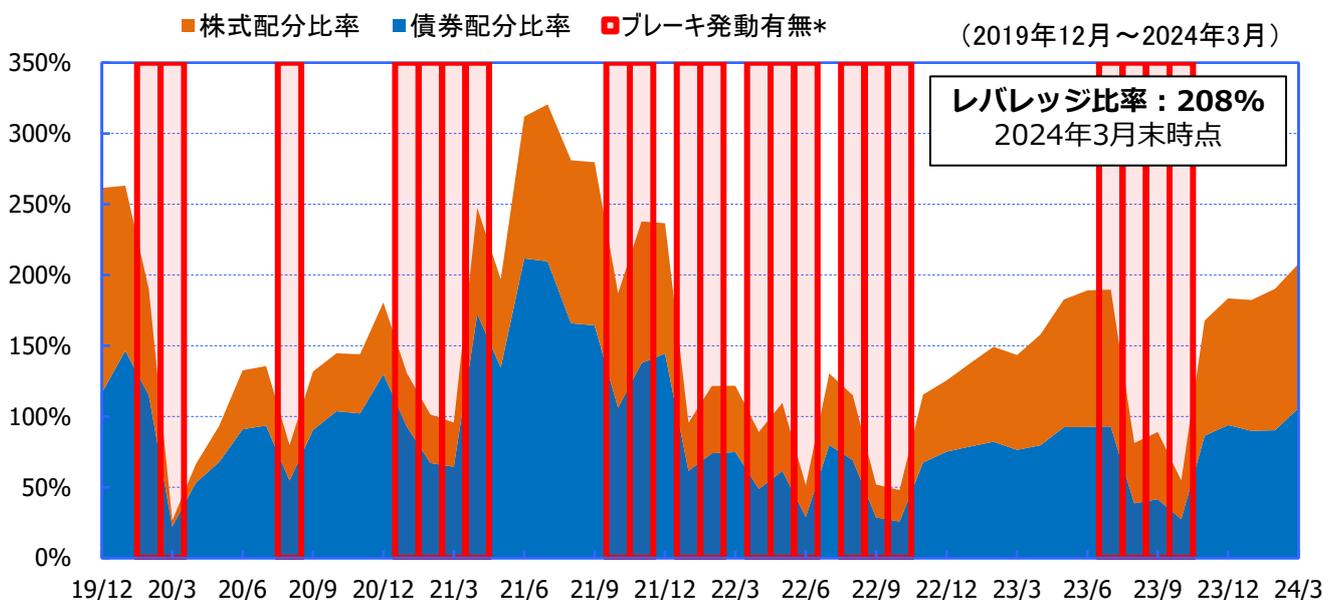
当ファンドでは、世界各国の株価指数先物、債券先物等に投資を行い、独自の数量モデルを活用してポジションを構築しています。また、目標ボラティリティ水準（年率10%程度）を維持し、機動的な投資配分比率のコントロールを通じて、市場の上昇局面における収益の拡大と下落局面における損失の抑制を目指します。

■スマート・レバレッジ戦略の状況

「株式と債券の同時下落」に備えるHEAVYモデルのブレーキ機能は、2019年11月の運用開始来、強弱をつけながら様々な期間にわたって発動しました。2023年は、8月～10月にかけて、世界の株式および債券市場が3ヶ月連続で下落しましたが、7月末にはHEAVYモデルが発動したことで、ポジションを大きく圧縮することに成功しています。また、11月以降は、株式および債券市場が反発する中、HEAVYモデルが11月中旬に解除されたことによりポジションは拡大に向かい、2024年3月末時点でのレバレッジ比率は208%（株式102%、債券106%）となっています。

※HEAVYモデルのブレーキ機能の発動状況については、マン・グループ東京支店より提供される速報を基に記載しており、今後修正される可能性があります。

2019年12月末からのレバレッジ比率の推移（月末ベース）



(出所) マン・グループ

* 「株式と債券の同時下落」に備える「HEAVYモデル」の発動有無を指します。ブレーキの発動が必ずしもファンドへプラスのパフォーマンスを与えるとは限りません。

※ 比率は、組入ファンドの純資産総額に対するものです。

※ レバレッジ比率は、投資元本に対する株式、債券・金利の取引の元本または想定元本の割合を示しています。なお、債券・金利セクターにつきましては、個別取引ごとの金利リスクの違いを考慮し、10年国債の想定元本に換算しています。（例えば、10年国債よりもデュレーションが短い金利先物の想定元本は小さくなるように調整されます。）

引き続き、株式・債券のリスクを徹底的にモニタリング

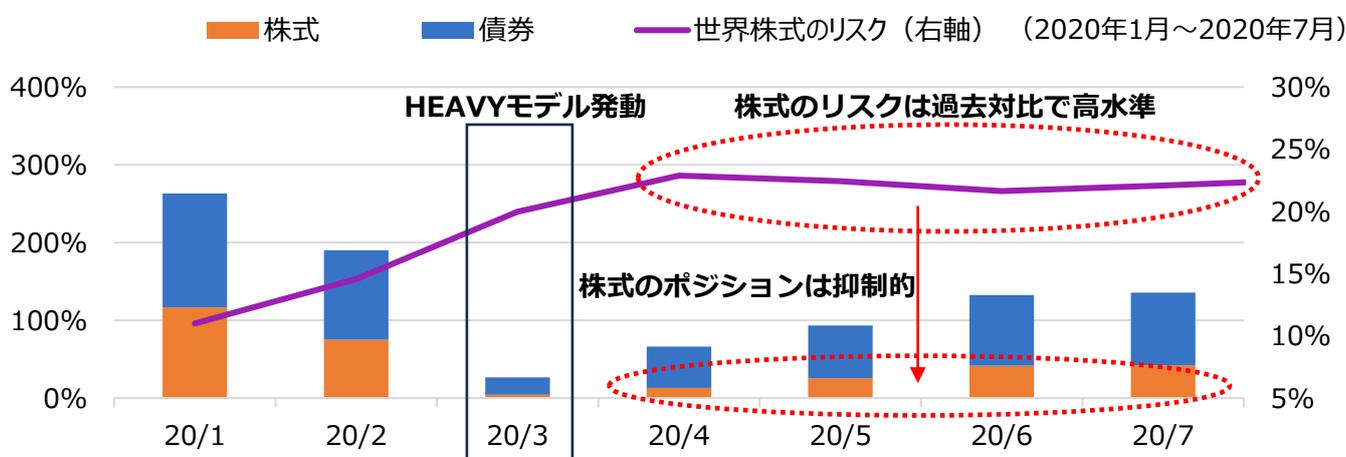
■レバレッジ・コントロールの運用状況

当ファンドは、日々のレバレッジ・コントロールを通じて、ファンドのリスクが一定になるようにコントロールしています（＝リスク・コントロール）。そのため、投資対象市場のリスクが高い（低い）場合は、一定のリスクを保つため保有比率を低位（高位）にします。

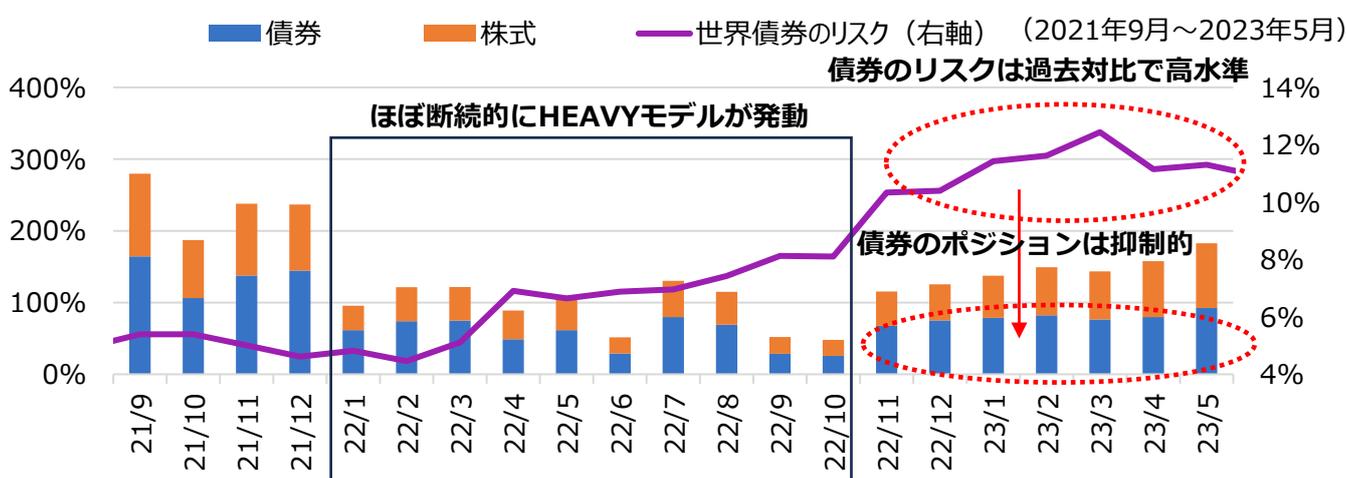
代表的な事例を2つ挙げると、1つ目は、2020年のコロナウイルスの世界的な感染拡大に伴う市場急落（コロナショック）時です。主に株式市場のリスクが上昇し、その後もリスクの高い状況が続いた結果、株式の投資比率を抑えた運用を行いました。2つ目は、2022年の世界的なインフレ進行に伴う金利上昇時です。同期間においては、主に債券市場のリスクが上昇し、その後も高水準が継続した結果、債券の投資比率を抑えた運用となっています。このような市場が不安定な局面において、むやみに投資比率を拡大すれば、ファンドの取るリスクが過大になり、想定外の大きな損失に見舞われる可能性があります。

当ファンドでは、市況環境に応じて徹底したレバレッジ・コントロールを行い、中長期で安定したリターンの獲得を目指していきます。

局面①：コロナショック時（前後）のレバレッジ比率



局面②：世界的なインフレ進行に伴う金利上昇時（前後）のレバレッジ比率



(出所) マン・グループ、ブルームバーグ

※ 世界株式：MSCIワールド（配当なし、米ドル建て）、世界債券：FTSE世界国債インデックス（米ドル建て）

※ リスク水準は月次リターンをベースに年率換算しています。

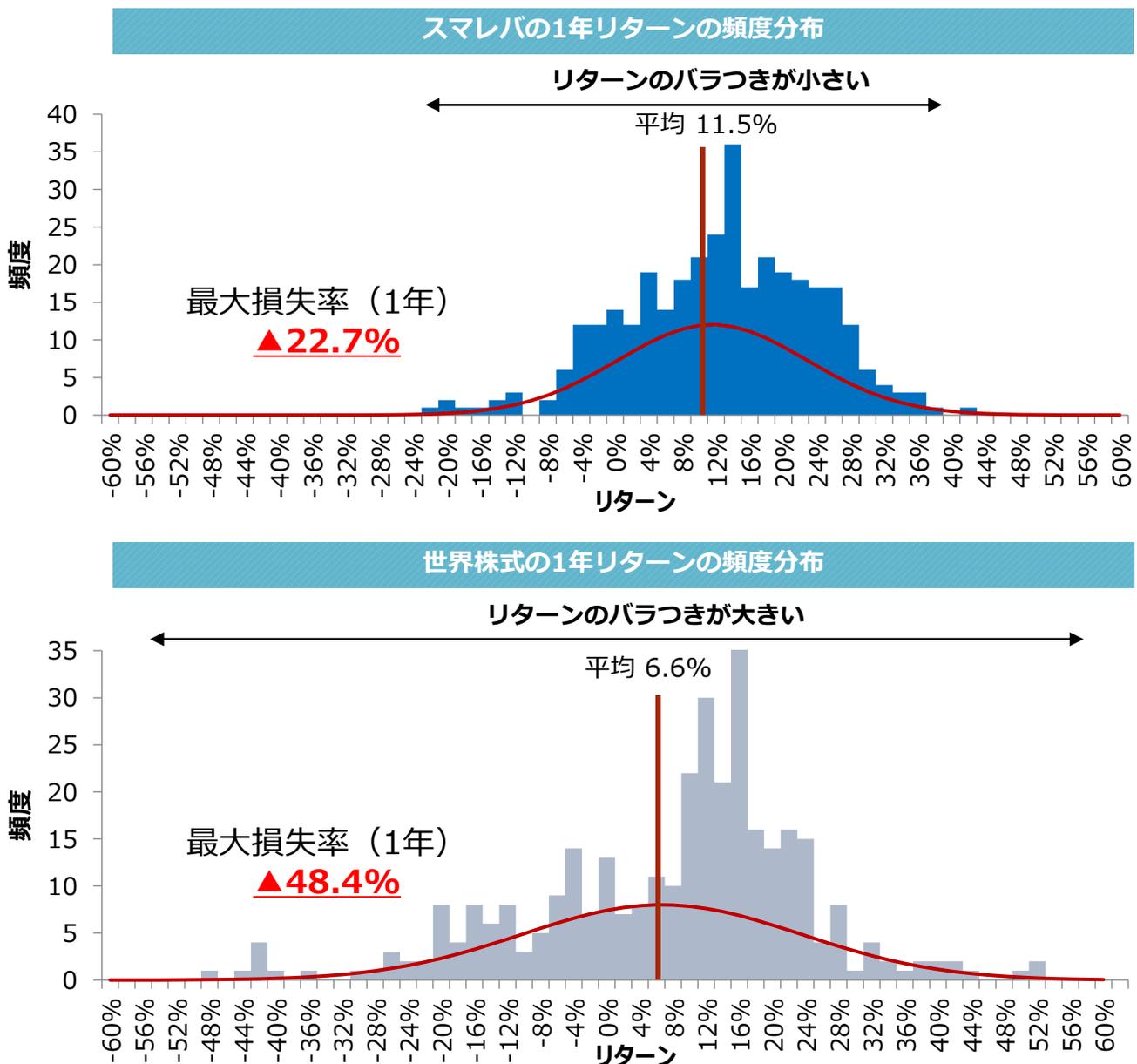
※ レバレッジ比率は、組入ファンドの純資産総額に対するものです。

※ レバレッジ比率は、投資元本に対する株式、債券・金利の取引の元本または想定元本の割合を示しています。なお、債券・金利セクターにつきましては、個別取引ごとの金利リスクの違いを考慮し、10年国債の想定元本に換算しています。（例えば、10年国債よりもデデュレーションが短い金利先物の想定元本は小さくなるように調整されます。）

■レバレッジ・コントロールによりリターンの安定性が向上

当ファンドは、日々のレバレッジ・コントロールを通じて、ファンドのリスクが一定になるようにコントロールしています。これにより、リターンのバラつきを狭い範囲にコントロール（＝リターンを安定化）することが期待されます。一方、市場のリスクは常に変化するため、リスクをコントロールすることなく、世界株式等に投資し続けた場合、局面によって取るリスク量が異なることで、結果としてリターンのバラつきが大きくなることが確認できます。

資産運用においては、大きな損失を防ぐことが極めて重要です（次頁以降で説明）。当ファンドは、日々の徹底したレバレッジ・コントロールで大きな損失を避けることにより、中長期的に見て世界株式を上回るパフォーマンスが期待されます。



（出所）マン・グループ、ブルームバーグ

※ それぞれ1994年12月～2024年3月の月次リターンを基に算出。

※ 当頁の分析にはスマレバ（米ドル建て）を使用しています。

※ スマレバ（米ドル建て）は1994年12月～2018年11月までシミュレーションデータ、2018年12月以降は実トラックデータを使用。

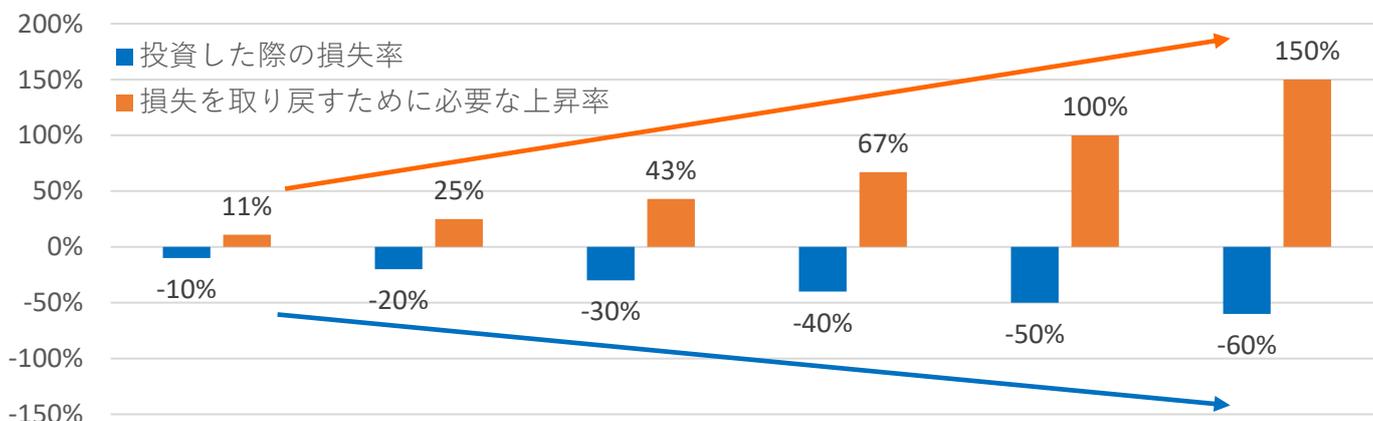
※ 世界株式：MSCIワールド（配当なし、米ドル建て）

※ 計測期間が異なる場合は、結果も異なる点にご注意ください。分析対象ファンドにおける運用管理費用等（年率0.95%）を控除し算出しています。上記は過去のデータであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。また、当ファンドの運用実績ではありません。ファンドの投資成果を示唆あるいは保証するものでもありません。

ご参考①：相場急落時における大きな損失を抑えることの重要性

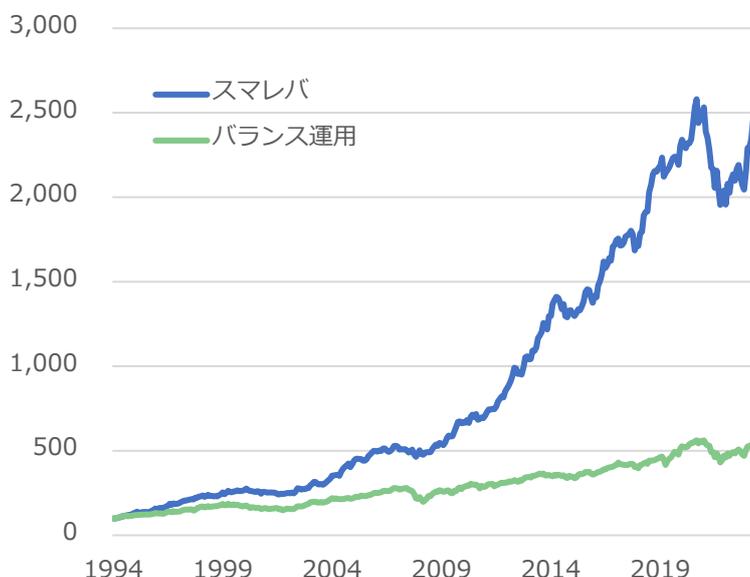
■大きな損失は取り戻すのが難しい

資産運用では、リスクを抑えて大きな損失を回避することが重要です。なぜなら、損失が大きくなればなるほど、その損失を取り戻すには、より高い上昇率が必要になるからです。仮に大きな利益を獲得していたとしても、一度の大きな下落に遭遇することで、これまでの利益を失うばかりか、投資元本を割って損失を出してしまうことも起こり得ます。



下記のグラフでは、バランス運用（世界株式、世界債券をそれぞれ50%組み入れ）が上昇/下落した時に、当ファンドがどの程度上昇/下落したかを見たものです。当ファンドは、バランス運用が上昇した際にはバランス運用よりも高い**105%程度**の追随率となる一方、下落時には追随率を**52%程度**にとどめています。

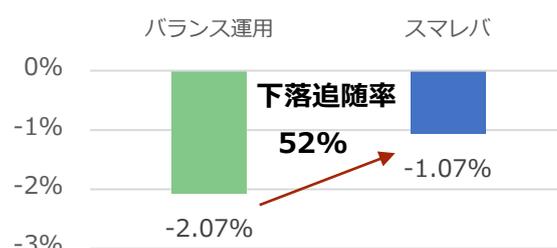
スマレバとバランス運用の値動き推移



バランス運用が上昇した月の値動き比較



バランス運用が下落した月の値動き比較



(出所) マン・グループ、ブルームバーグ

※ 当頁の分析にはスマレバ（米ドル建て）を使用しています。

※ 1994年12月～2024年3月の月次リターンを基に算出（1994年12月末を100として指数化）。

※ スマレバ（米ドル建て）は1994年12月～2018年11月までシミュレーションデータ、2018年12月以降は実トラックデータを使用。

※ 世界株式：MSCIワールド（配当込み、米ドル建て）、世界債券：FTSE世界国債インデックス（米ドル建て）

※ 計測期間が異なる場合は、結果も異なる点にご注意ください。分析対象ファンドにおける運用管理費用等（年率0.95%）を控除し算出しています。上記は過去のデータであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。また、当ファンドの運用実績ではありません。ファンドの投資成果を示唆あるいは保証するものでもありません。

ご参考②：米国利上げ停止後局面における良好なパフォーマンス獲得機会

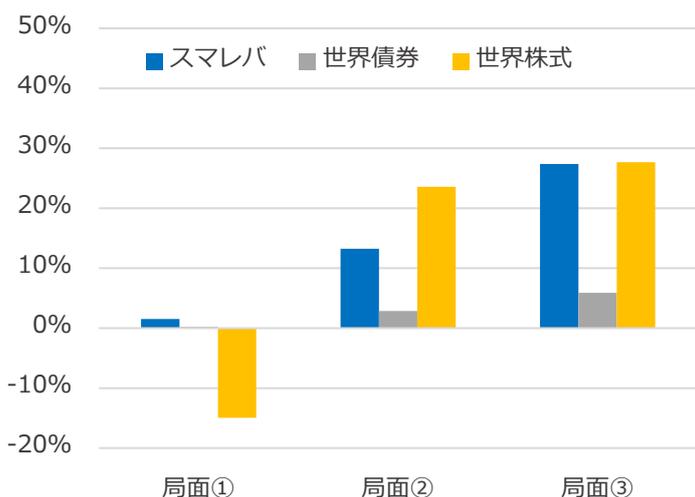
■ 明暗が分かれる株式・債券との比較

当戦略において、米国での利上げ停止局面が過去3回ありましたが、利上げ停止後1年間、3年間の両期間でプラスのリターンを獲得しました。世界株式においては、米国利上げ停止後（1年間、3年間）のパフォーマンスは局面によって強弱まちまちであり、高いリターンを獲得する局面がある一方で、マイナスリターンとなった局面も存在します。世界債券においては、米国利上げ停止後（1年間、3年間）のパフォーマンスはいずれもプラスリターンを獲得しているものの、局面によっては対世界株式においてリターン水準が大きく見劣りする期間もありました。

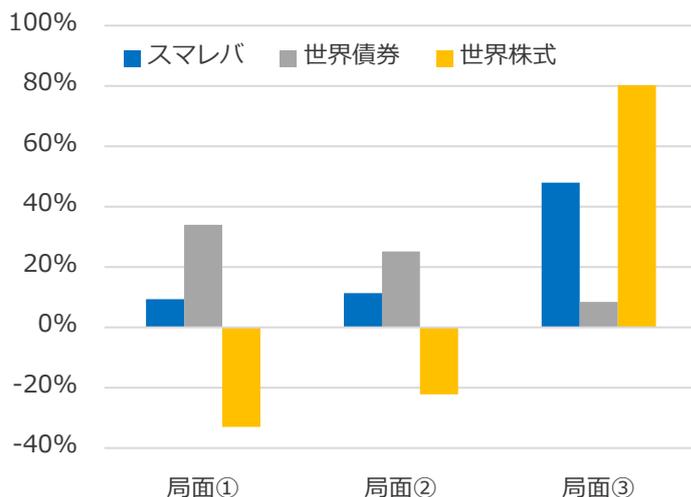
米国の利上げについては2023年後半以降連続して見送られており、2024年には複数回の利下げが市場予想のメインシナリオとされています。今回の局面において、世界株式・債券のいずれの資産が良好なパフォーマンスをあげるのかを予想することは難しいものの、いずれの資産も保有する当戦略は、過去においては良好なパフォーマンス獲得機会が存在していたといえます。

当戦略は、市場リスクを慎重にモニタリングし、各資産のポジションを臨機応変に変更（日次リバランス）することで中長期での資産成長を目指します。

米国利上げ停止から1年間のパフォーマンス



米国利上げ停止から3年間のパフォーマンス



	スマレバ	世界債券	世界株式
局面①：2000/5~2001/5	1.5%	0.2%	-14.9%
局面②：2006/6~2007/6	13.3%	2.9%	23.6%
局面③：2018/12~2019/12	27.4%	5.9%	27.7%

	スマレバ	世界債券	世界株式
局面①：2000/5~2003/5	9.4%	34.0%	-33.0%
局面②：2006/6~2009/6	11.4%	25.2%	-22.2%
局面③：2018/12~2021/12	48.0%	8.5%	80.3%

（出所）マン・グループ、ブルームバーグ

※ 当頁の分析にはスマレバ（米ドル建て）を使用しています。

※ 1994年12月～2024年3月の月次リターンを基に算出。

※ スマレバ（米ドル建て）は1994年12月～2018年11月までシミュレーションデータ、2018年12月以降は実トラッキングデータを使用。

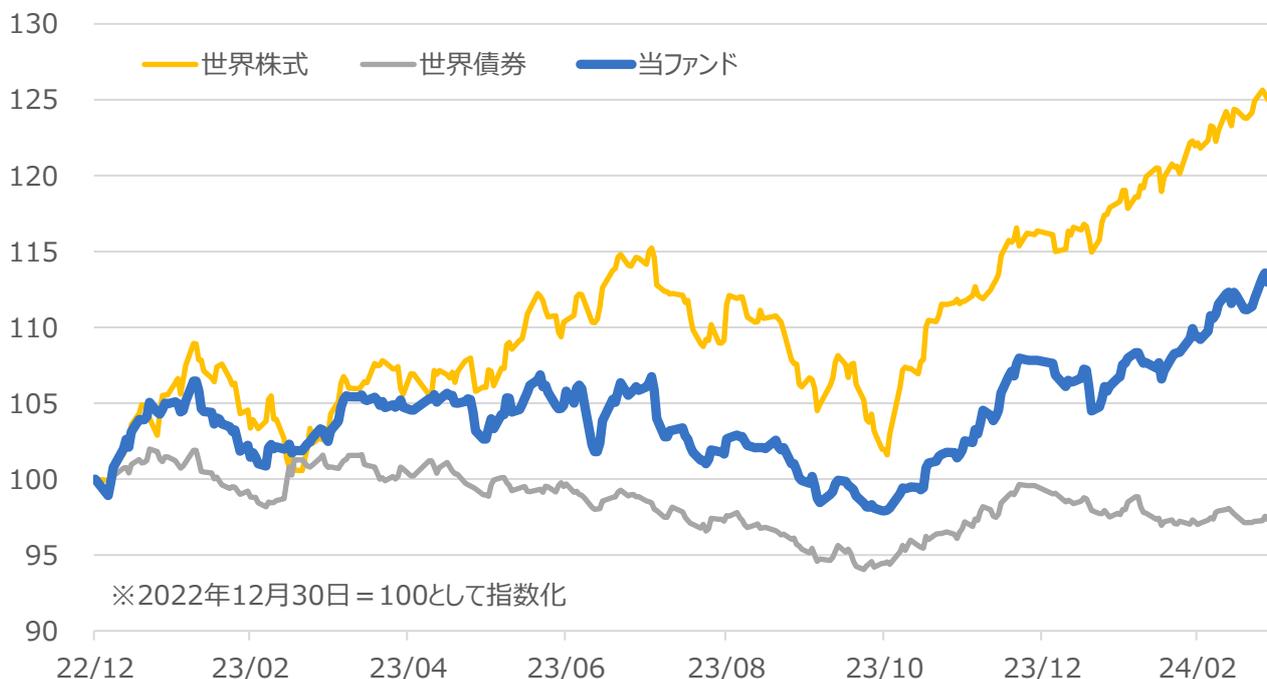
※ 世界株式：MSCIワールド（配当込み、米ドル建て）、世界債券：FTSE世界国債インデックス（米ドル建て）

※ 計測期間が異なる場合は、結果も異なる点にご注意ください。分析対象ファンドにおける運用管理費用等（年率0.95%）を控除し算出しています。上記は過去のデータであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。また、ファンドの運用実績ではありません。ファンドの投資成果を示唆あるいは保証するものでもありません。

ご参考③：当ファンドと世界株式・債券のパフォーマンス比較

当ファンドと世界株式・債券の値動きの推移（2023年来、日次ベース）

（2022年12月30日～2024年3月29日）



当ファンドの設定来の投資効率は、ブレーキ機能の発動によりコロナショック後の急反発に出遅れてしまったことや、以前より堅調に推移していた債券市場が2022年以降軟調に推移していることなどから、世界株式を下回る水準となっております。

当ファンドと世界株式・債券のリスク/リターン特性（設定来、月次ベース）

（2019年11月末～2024年3月末）

	当ファンド	世界株式	世界債券
累積リターン	-3.6%	43.4%	-15.5%
年率リターン	-0.8%	8.7%	-3.8%
年率リスク	9.9%	18.8%	5.0%
投資効率	-0.09	0.46	-0.75

（出所）ブルームバーグ

- ※ 世界株式はMSCIワールド（配当込み、円ヘッジ）、世界債券はFTSE世界国債インデックス（円ヘッジ）を使用。
- ※ 円ヘッジとは、外貨建て資産の為替変動による影響を抑えるため、対円で為替ヘッジを行う仕組みです。その際、対象通貨の金利差分のヘッジコスト（プレミアム）が発生します。為替変動リスクの低減を図りますが、為替変動リスクを完全に排除できるものではありません。
- ※ 世界株式・債券の値動きの推移は、当ファンドの組入外投が実質的に参照する市場日付（通常基準価額計算日の2営業日前）をベースに指数化しています。
- ※ 当ファンドの推移には「分配金再投資基準価額」を用いています。
- ※ 「分配金再投資基準価額」は、分配金（税引前）を分配時にファンドへ再投資したものとみなして計算しています。
- ※ 基準価額の計算において、実質的な運用管理費用（信託報酬）は控除しています（後述のファンドの費用をご覧ください）。
- ※ 過去の実績を示したものであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。

ご参考④：為替ヘッジの効果と為替ヘッジコスト

■ 為替ヘッジの効果

当ファンドは、為替変動リスクを低減するため、為替ヘッジを行っています。為替ヘッジを行うことにより、為替変動リスクを完全に排除できるものではないものの、円に対し、他国の通貨が大きく変動した場合でも、基準価額に及ぼす為替の影響を限定的なものにコントロールすることが可能です。

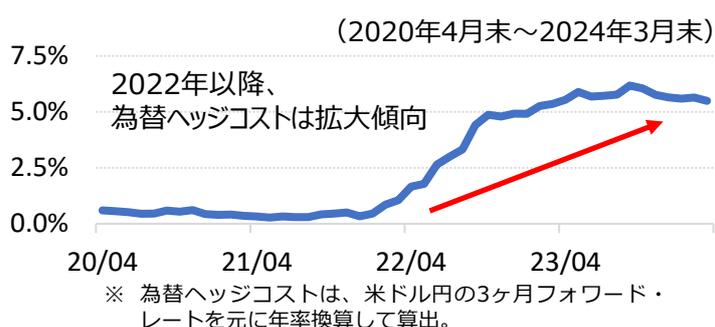
■ 当ファンド設定来での円安進行

当ファンド設定来の期間で見ると、米ドルに対し、大きく円安が進行していることが分かります（下左図）。海外資産に投資を行っている投資信託などでは、為替ヘッジを行わずに運用しているものも少なくありません。その場合、円安進行に伴う海外資産の円ベースでの価格上昇のメリットを受けられる一方、円高が進行した場合には保有する海外資産の円ベースでの価値の下落の影響を受けることになります。

ファンド設定来での為替（米ドル円）の推移（月次）



為替ヘッジコストの推移（月次/年率）



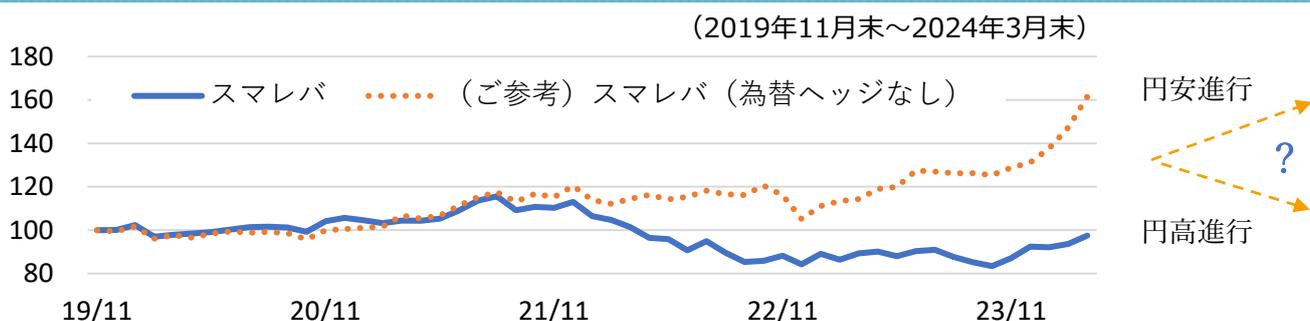
■ 為替ヘッジにかかるコストとその推移

為替ヘッジを行う際には、日本円の金利が組入資産の通貨の金利より低い場合、金利差相当分がコストとなります。また、需給要因等によっては、さらにコストが拡大することもあります。実際に過去数年で見ると、為替ヘッジコストは2023年にかけて大きく上昇しています（上右図）。

■ 為替ヘッジを行わなかった場合のシミュレーション

ご参考までに、為替ヘッジを行わなかったとした場合の投資対象ファンドのパフォーマンスは下記の通りです。上述のように、当ファンド設定来では円安が大きく進行し、かつ、為替ヘッジコストの上昇があったため、為替ヘッジを行わなかった場合の方が良いパフォーマンス結果となっています。しかし、今後、例えば米国の利下げなどを背景に円高が進行した場合、為替ヘッジを行っていないケースにおいては、パフォーマンスがマイナスの影響を受ける可能性があります。

投資対象ファンド・為替ヘッジを行わなかった場合のシミュレーションの推移（月次）



(出所) マン・グループ、ブルームバーグ

※ シミュレーションにおけるスマレバのリターンは、外国籍ファンド（米ドル建て/運用報酬等控除後）のリターンから、為替ヘッジコスト（米ドル円の3ヶ月フォワード・レートを元に算出）および国内信託報酬を控除。スマレバ（為替ヘッジなし）のリターンは、外国籍ファンド（米ドル建て/運用報酬等控除後）のリターンに、米ドル円の為替変動を乗じ、国内信託報酬を控除し算出。いずれも月次ベース、国内報酬率は2ヶ月間における騰落率を元に算出。2019年11月末を100として指数化。

※ 計測期間が異なる場合は、結果も異なる点にご注意ください。上記は過去のデータであり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。また、ファンドの運用実績ではありません。

ご参考⑤：当ファンドの運用のポイント

ポイント① スマート・レバレッジ戦略

- 当ファンドでは、長期運用に適したリスク水準を維持しながら効率的なリターンを獲得するために①リスクベースでの資産配分、②レバレッジ・コントロールにより、攻めと守りの運用をめざします。
- 世界の市場データをシステムで24時間徹底的に分析、管理することで、常に最適と考えられるポートフォリオを維持することをめざします。

リスクベースの資産配分

- 各資産のリスク量(影響度)が釣りあうように、配分比率を日々調整

■ 資産配分

価格変動が比較的大きい資産

価格変動が比較的小さい資産

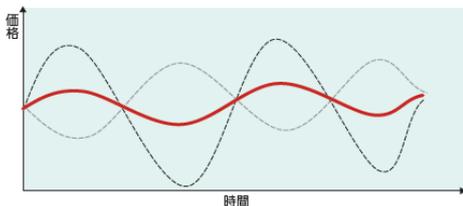
配分比率は相対的に少なめ

配分比率は相対的に多め

- 資産のリスク量が分散されることで、個別資産の価格変動の影響が抑えられ値動きが安定

〈値動きのイメージ〉

〈配分比率の調整イメージ〉



レバレッジ・コントロール

- 組入資産のリスク水準に応じて、レバレッジ比率を機動的に調整

■ レバレッジ比率

リスク水準が上昇

リスク水準が低下

レバレッジ比率引き下げ

レバレッジ比率引き上げ

〈レバレッジ比率・配分比率のイメージ〉

〈レバレッジ比率の調整イメージ〉



ポイント② 2つの自動ブレーキ機能（守りの強化）

- 当ファンドでは、最適なポートフォリオでも損失回避が難しい2つの局面（「株式と債券の同時下落局面」、「組入資産の下落トレンド局面」）から、運用資産を守る2つのブレーキを備えています。

ブレーキ①

「株式と債券の同時下落」に備える
「HEAVYモデル」

10分刻みでモニタリングし、異常を察知するとポートフォリオ全体の組入比率を最大半減

- ✓ 当ファンドでは、世界の「株式先物」と「国債先物」の価格変動を10分刻みでモニタリングします。
- ✓ 高頻度データの分析により同時下落の兆候とみられる異常値を察知した場合、ポートフォリオ全体の組入比率を最大半減することで、「株式と債券の同時下落」から運用資産を守ります。

ブレーキ②

「組入資産の下落トレンド」に備える
「モメンタムシグナル」

下落トレンドを察知した資産の組入比率を最大半減

- ✓ 一般的に資産価格の値動きはトレンドが一定期間継続するという性質があると考えられています。下落トレンドが続いている資産の組入れは、パフォーマンスの悪化要因となります。
- ✓ 当ファンドは、世界中の資産価格のトレンドをマン AHL独自のノウハウで分析します。下落トレンドを察知した資産については、組入比率を最大半減させることで、個別資産の下落トレンドから運用資産を守ります。



マンAHLスマート・レバレッジ戦略ファンド 愛称：スマレバ 特集ページ

<https://www.daiwa-am.co.jp/special/fund/2780.html>

※外部サイトに遷移します。

ファンドの目的・特色

ファンドの目的

- ・世界各国の株価指数先物、債券先物等に投資を行ない、信託財産の成長をめざします。

ファンドの特色

- ・世界各国の株価指数先物、債券先物等に投資を行ない、独自の数量モデルを活用してポジションを構築します。
- ・運用は、AHL パートナース・エルエルピーが行ないます。
- ・為替変動リスクを低減するため、為替ヘッジを行ないます。
- ・毎年 4 月 12 日および 10 月 12 日（休業日の場合翌営業日）に決算を行ない、収益分配方針に基づいて収益の分配を行ないます。

投資リスク

- 当ファンドは、値動きのある有価証券等に投資しますので、基準価額は変動します。したがって、**投資元本が保証されているものではなく、これを割込むことがあります。信託財産に生じた利益および損失は、すべて投資者に帰属します。投資信託は預貯金とは異なります。**基準価額の主な変動要因は、以下のとおりです。

（価格変動リスク・信用リスク） 株価の変動	組入資産の価格が下落した場合には、基準価額が下落する要因となり、投資元本を割込むことがあります。 株価は、政治・経済情勢、発行企業の業績、市場の需給等を反映して変動します。発行企業が経営不安、倒産等に陥った場合には、投資資金が回収できなくなることもあります。新興国の証券市場は、先進国の証券市場に比べ、一般に市場規模や取引量が小さく、流動性が低いことにより本来想定される投資価値とは乖離した価格水準で取引される場合もあるなど、価格の変動性が大きくなる傾向が考えられます。
（価格変動リスク・信用リスク） 公社債の価格変動	組入資産の価格が下落した場合には、基準価額が下落する要因となり、投資元本を割込むことがあります。 公社債の価格は、一般に金利が低下した場合には上昇し、金利が上昇した場合には下落します。また、公社債の価格は、発行体の信用状況によっても変動します。特に、発行体が債務不履行を発生させた場合、またはその可能性が予想される場合には、公社債の価格は下落します。 新興国の公社債は、先進国の公社債と比較して価格変動が大きく、債務不履行が生じるリスクがより高いものになると考えられます。
株価指数先物取引・債券先物取引の 利用に伴うリスク	株価指数先物、債券先物の価格は、対象証券または指数の値動き、先物市場の需給等を反映して変動します。先物を買建てている場合の先物価格の下落により損失が発生し、基準価額が下落する要因となり、投資元本を割込むことがあります。また、先物を買建てている場合の株式市場または債券市場の下落によって、株式市場または債券市場の変動率に比べて大きな損失が生じる可能性があります。なお、対象証券または指数の値動き等に変動がなくても、収益または損失が発生することがあります。
当ファンドが活用する戦略に関する リスク	市場の予期せぬ値動き等により、当戦略が効果的に機能しない可能性があり、基準価額が予想外に下落する場合があります。 当ファンドでは、デリバティブ取引を利用して純資産規模を上回る買建てを行なうことから、価格変動リスクが現物有価証券に投資する場合と比べて大きくなる可能性があります。また、レバレッジを活用して取引を行ないますので、投資対象の市場における値動きに比べて大きな損失が生じる可能性があります。
為替変動リスク	外貨建資産については、資産自体の価格変動のほか、当該外貨の円に対する為替レートの変動の影響を受けます。組入外貨建資産について、当該外貨の為替レートが円高方向に進んだ場合には、基準価額が下落する要因となり、投資元本を割込むことがあります。特に、新興国の為替レートは短期間に大幅に変動することがあり、先進国と比較して、相対的に高い為替変動リスクがあります。 当ファンドは、為替ヘッジを行ないますが、影響をすべて排除できるわけではありません。また、

	為替ヘッジを行なう際、日本円の金利が組入資産の通貨の金利より低いときには、金利差相当分がコストとなり、需給要因等によっては、さらにコストが拡大することもあります。
カントリー・リスク	投資対象国・地域において、政治・経済情勢の変化等により市場に混乱が生じた場合、または取引に対して新たな規制が設けられた場合には、基準価額が予想外に下落したり、方針に沿った運用が困難となることがあります。 新興国への投資には、先進国と比べて大きなカントリー・リスクが伴います。
その他	解約資金を手当てするため組入証券を売却する際、市場規模や市場動向によっては市場実勢を押下げ、当初期待される価格で売却できないこともあります。この場合、基準価額が下落する要因となります。

※基準価額の変動要因は、上記に限定されるものではありません。

その他の留意点

- 当ファンドのお取引に関しては、金融商品取引法第 37 条の 6 の規定（いわゆるクーリング・オフ）の適用はありません。
- 当ファンドは、大量の解約が発生し短期間で解約資金を手当てする必要が生じた場合や主たる取引市場において市場環境が急変した場合等に、一時的に組入資産の流動性が低下し、市場実勢から期待できる価格で取引できないリスク、取引量が限られてしまうリスクがあります。これにより、基準価額にマイナスの影響を及ぼす可能性や、換金の申込みの受け付けが中止となる可能性、換金代金のお支払いが遅延する可能性があります。
- 当ファンドは、忠実義務に基づき、投資する投資信託証券について、その価格が入手できない、または入手した価格で評価すべきでないと考えられる場合には、適正と判断する直近の日の価格など当社が時価と認める価格で評価することがあります。

ファンドの費用

投資者が直接的に負担する費用

	料率等	費用の内容
購入時手数料	販売会社が別に定める率 (上限) <u>3.3%(税抜3.0%)</u>	購入時の商品説明または商品情報の提供、投資情報の提供、取引 執行等の対価です。
信託財産留保額	ありません。	—

投資者が信託財産で間接的に負担する費用

	料率等	費用の内容										
運用管理費用 (信託報酬)	年率1.2375% (税抜1.125%)以内*	運用管理費用の総額は、日々の信託財産の純資産総額に対して 左記の率を乗じて得た額とします。運用管理費用は、毎日計上 され日々の基準価額に反映されます。										
配分 (税抜) (注1)	委託会社	年率0.35%										
	販売会社	年率0.75%										
	受託会社	年率0.025%										
<p>*ファンド設定日から起算して66営業日目の翌日以降において、前営業日における過去65 営業日間の分配金再投資基準価額*の騰落率が2%未満である場合には、以下となります。</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="2">運用管理費用</th> <th>年率0.6875%(税抜0.625%)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td rowspan="3">配分 (税抜) (注1)</td> <td>委託会社</td> <td>年率0.20%</td> </tr> <tr> <td>販売会社</td> <td>年率0.40%</td> </tr> <tr> <td>受託会社</td> <td>年率0.025%</td> </tr> </tbody> </table> <p>※分配金(税引前)を分配時にファンドへ再投資したものとみなして計算したもの</p>			運用管理費用		年率0.6875%(税抜0.625%)	配分 (税抜) (注1)	委託会社	年率0.20%	販売会社	年率0.40%	受託会社	年率0.025%
運用管理費用		年率0.6875%(税抜0.625%)										
配分 (税抜) (注1)	委託会社	年率0.20%										
	販売会社	年率0.40%										
	受託会社	年率0.025%										
投資対象とする 投資信託証券	年率1.09%以内 (提出日現在:0.95%程度)	投資対象ファンドにおける運用管理費用等です。 ※費用の詳細については[投資対象ファンドの概要]をご参照 下さい。										
実質的に負担する 運用管理費用	<u>年率1.6375%~2.1875%(税込)程度</u> ※提出日現在。今後この数値は見直される場合があります。											
その他の費用・ 手数料	(注2)	監査報酬、有価証券売買時の売買委託手数料、先物取引・オプ ション取引等に要する費用、資産を外国で保管する場合の費用等 を信託財産でご負担いただきます。										

(注1)「運用管理費用の配分」には、別途消費税率を乗じた額がかかります。

(注2)「その他の費用・手数料」については、運用状況等により変動するため、事前に料率、上限額等を示すことができません。

※購入時手数料について、くわしくは販売会社にお問合わせ下さい。

※運用管理費用の信託財産からの支払いは、毎計算期末または信託終了時に行なわれます。

※手数料等の合計額については、保有期間等に応じて異なりますので、表示することができません。

お申込みメモ

購入単位	最低単位を1円単位または1口単位として販売会社が定める単位
購入価額	購入申込受付日の翌々営業日の基準価額（1万口当たり）
購入代金	販売会社が定める期日までにお支払い下さい。
換金単位	最低単位を1口単位として販売会社が定める単位
換金価額	換金申込受付日の翌々営業日の基準価額（1万口当たり）
換金代金	原則として換金申込受付日から起算して6営業日目からお支払いします。
申込受付中止日	① ロンドンの銀行またはダブリンの銀行の休業日 ② ロンドンの銀行またはダブリンの銀行の休業日（土曜日および日曜日を除きます。）の前営業日 ③ ①②のほか、一部解約金の支払い等に支障を来すおそれがあるとして委託会社が定める日 （注）申込受付中止日は、販売会社または委託会社にお問合わせ下さい。
申込締切時間	午後3時まで（販売会社所定の事務手続きが完了したもの）
換金制限	信託財産の資金管理を円滑に行なうために大口の換金申込みには制限があります。
購入・換金申込受付 の中止および取消し	金融商品取引所等における取引の停止、外国為替取引の停止その他やむを得ない事情が発生した場合には、購入、換金の申込みの受け付けを中止すること、すでに受け付けた購入、換金の申込みを取消すことがあります。
繰上償還	◎ 主要投資対象とする組入外国投資証券が存続しないこととなる場合には、受託会社と合意のうえ、信託契約を解約し、信託を終了（繰上償還）させます。 ◎ 次のいずれかの場合には、委託会社は、事前に受益者の意向を確認し、受託会社と合意のうえ、信託契約を解約し、繰上償還できます。 ・受益権の口数が30億口を下ることとなった場合 ・信託契約を解約することが受益者のため有利であると認めるとき ・やむを得ない事情が発生したとき
収益分配	年2回、収益分配方針に基づいて収益の分配を行ないます。 （注）当ファンドには、「分配金再投資コース」と「分配金支払いコース」があります。 なお、お取扱い可能なコースおよびコース名については異なる場合がありますので、販売会社にお問合わせ下さい。
課税関係	課税上は株式投資信託として取扱われます。配当控除、益金不算入制度の適用はありません。 公募株式投資信託は税法上、一定の要件を満たした場合にNISA（少額投資非課税制度）の適用対象となります。 当ファンドは、NISAの対象ではありません。 ※税法が改正された場合等には変更される場合があります。

設定・運用:

大和アセットマネジメント

Daiwa Asset Management

商号等

大和アセットマネジメント株式会社
金融商品取引業者 関東財務局長(金商)第352号

加入協会

一般社団法人投資信託協会
一般社団法人日本投資顧問業協会
一般社団法人第二種金融商品取引業協会

※詳しくは「投資信託説明書（交付目論見書）」をご覧ください。

Daiwa Asset Management

当資料のお取扱いにおけるご注意

- 当資料は、ファンドの状況や関連する情報等をお知らせするために大和アセットマネジメント株式会社が作成したものです。
- 当ファンドのお申込みにあたっては、販売会社よりお渡しする「投資信託説明書（交付目論見書）」の内容を必ずご確認くださいのうえ、ご自身でご判断ください。
- 投資信託は値動きのある有価証券等に投資しますので、基準価額は大きく変動します。したがって、投資元本が保証されているものではありません。信託財産に生じた利益および損失はすべて投資者に帰属します。投資信託は預貯金とは異なります。
- 投資信託は預金や保険契約とは異なり、預金保険機構・保険契約者保護機構の保護の対象ではありません。証券会社以外でご購入いただいた投資信託は投資者保護基金の対象ではありません。
- 当資料は信頼できると考えられる情報源から作成しておりますが、その正確性・完全性を保証するものではありません。運用実績などの記載内容は過去の実績であり、将来の成果を示唆・保証するものではありません。記載する指数・統計資料等の知的所有権、その他一切の権利はその発行者および許諾者に帰属します。また、税金、手数料等を考慮しておりませんので、投資者の皆さまの実質的な投資成果を示すものではありません。記載内容は資料作成時点のものであり、予告なく変更されることがあります。記載する投資判断は現時点のものであり、将来の市況環境の変動等を保証するものではありません。
- 当資料中で個別企業名が記載されている場合、あくまでも参考のために掲載したものであり、各企業の推奨を目的とするものではありません。また、ファンドに今後組み入れることを、示唆・保証するものではありません。
- 分配金は収益分配方針に基づいて委託会社が決定します。あらかじめ一定の額の分配をお約束するものではありません。分配金が支払われない場合もあります。

マンAHLスマート・レバレッジ戦略ファンド（愛称：スマレバ）

販売会社名（業態別、50音順） （金融商品取引業者名）		登録番号	加入協会			
			日本証券業協会	一般社団法人 金融先物 取引業協会	一般社団法人 日本投資 顧問業協会	一般社団法人 第二種金融商 品取引業協会
株式会社イオン銀行 (委託金融商品取引業者 マネックス証券株式会社)	登録金融機関	関東財務局長(登金)第633号	○			
株式会社SBI新生銀行 (委託金融商品取引業者 株式会社SBI証券)	登録金融機関	関東財務局長(登金)第10号	○	○		
株式会社SBI新生銀行 (委託金融商品取引業者 マネックス証券株式会社)	登録金融機関	関東財務局長(登金)第10号	○	○		
株式会社愛媛銀行	登録金融機関	四国財務局長(登金)第6号	○			
株式会社香川銀行	登録金融機関	四国財務局長(登金)第7号	○			
株式会社関西みらい銀行	登録金融機関	近畿財務局長(登金)第7号	○	○		
株式会社大東銀行	登録金融機関	東北財務局長(登金)第17号	○			
株式会社中京銀行	登録金融機関	東海財務局長(登金)第17号	○			
株式会社筑波銀行	登録金融機関	関東財務局長(登金)第44号	○			
株式会社富山銀行	登録金融機関	北陸財務局長(登金)第1号	○			
株式会社長野銀行	登録金融機関	関東財務局長(登金)第63号	○			
三井住友信託銀行株式会社	登録金融機関	関東財務局長(登金)第649号	○	○	○	
株式会社みなと銀行	登録金融機関	近畿財務局長(登金)第22号	○	○		
株式会社横浜銀行	登録金融機関	関東財務局長(登金)第36号	○	○		
あかつき証券株式会社	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第67号	○	○	○	
株式会社SBI証券	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第44号	○	○		○
OKB証券株式会社	金融商品取引業者	東海財務局長(金商)第191号	○			
大和証券株式会社	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第108号	○	○	○	○
ちばぎん証券株式会社	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第114号	○			
マネックス証券株式会社	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第165号	○	○	○	○
楽天証券株式会社	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第195号	○	○	○	○
リテラ・クリア証券株式会社	金融商品取引業者	関東財務局長(金商)第199号	○			

上記の販売会社は今後変更となる場合があります。また、販売会社によって、新規のご購入の取扱いを行っていない場合や、お申込み方法・条件等が異なります。くわしくは、販売会社にお問合わせ下さい。